

大辻都氏の学位請求論文『フランス語作家マリーズ・コンデとアフリカ アメリカ アンティユの往還』は、カリブ海アンティユ諸島のグアドループ(現フランス海外県)出身の女性作家、マリーズ・コンデの小説群の横断的な読解を通じて、そこにおける創造性と想像力の運動を体系的に跡づけるとともに、その創作活動をフランス語圏アンティユ文学の潮流に位置づけたものである。本論文は序論と結論を除いて2部から構成されており、第1部に3つの章が、第2部に5つの章が、それぞれ配置されている。以下ではまず、この構成に則して本論文の内容を略述する。

序論は、コンデという作家が身体に根差して創作活動を展開していることに着目し、コンデ自身の身体的な移動と創作とのかかわりという、本論文を動機づける問題意識を提示する。それを受けた第1部は、アンティユの人口構成がアフリカからの奴隷の搬送という歴史にもとづくことを踏まえながら、エメ・セゼールの「ネグリチュード」概念からエドゥアール・グリッサンの「アンティユ性」概念を経て、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアンらの「クレオール性」概念へといたるアンティユの思想史・文学史の包括的な理解を示し、それによってコンデの創作活動を論ずる上での枠組みを形成するものである。また、ヨーロッパ人作家によるアンティユ女性の表象の系譜をたどった上で、描かれる対象としての女性から描く主体としての女性への転換に焦点を当て、シュザンヌ・ラカスカード、シュザンヌ・セゼール、ミシェル・ラクロジル、シモーヌ・シュヴァールツ=バルトなど、アンティユ女性自身が作家として創作に従事した動向を追いながら、コンデという作家を本論文に導き入れている。

第2部は、コンデの主要な6つの小説作品を取り上げ、作品が中心的に志向している場所という観点から、それらの作品を「アフリカ」、「アメリカ」、「アンティユ」に類別化して、作品の詳細な読解と分析を提示するものであり、本論文の中心をなす部分である。まず、「アフリカ」への志向性を呈する作品として、自伝的小説ともいわれる『ヘレマコノン』を取り上げた章では、アンティユにとって起源とアイデンティティを求める場所であるアフリカと、そのアフリカにおけるあるアンティユ女性の挫折経験を通して、アンティユとアフリカとの文化的隔たりがいかに作中で対象化されるのかを検討している。次いで、「アメリカ」への志向性を有する作品として、『わたしは魔女ティチューバ』と『最後の預言王たち』とに着目した2つの章では、アフリカとアンティユとが交差する位置からさらにアメリカへと移動する作中人物に焦点を当て、アンティユとアメリカとの接触と両者の懸隔とを分析の俎上に乗せている。このうち、『わたしは魔女ティチューバ』については、英雄としてのマロン(逃亡奴隷)というアンティユ文学にしばしば登場する重要なテーマに対して、コンデが母子関係という要素を前景化していることを考察しており、また『最後の

『預言王たち』については、アンティユとアメリカとの地理的な連関を含めた相互的な連関を、地理的に拡散してゆく作中人物たちのネットワークという観点から把握している。

最後の2つの章では、「アンティユ」への志向性をもつ作品として、『悪辣な生』、『マングローヴ渡り』、『移り住む心』の3作品を取り上げている。『悪辣な生』については、母子関係の連鎖と、世界を彷徨しつつディアスポラを生きる作中人物たちのネットワークという論点を引き続き追究しつつ、クレオール的なフランス語を創作に導入することによるコンデの文体の特質を検討している。『マングローヴ渡り』と『移り住む心』については、複数の作中人物たちの、それ自体としては断片的な語りを積み重ねることによって多声的な語りの世界を構成するという、90年代のコンデ作品に顕著となる創作のあり方について考察している。それを通じて、アンティユから外部に拡散するとともに、外部からアンティユへと環流する人々が織りなすネットワークについて、さらに考察を深化させている。

結論においては、アンティユの思想史・文学史の大きな潮流を体現するセゼールのネグリチュード論やグリッサン、シャモワゾー、コンフィアンらのクレオール諸理論が、普遍主義によって差異を捨象しようとするフランスの共和制理念への対抗意識から発したものであるのに対して、そうした対抗意識から自由であり、かつ共和国という「父」にかわる独自の「父」を立ち上げたいという欲求からも自由なコンデの姿勢を確認しつつ、アンティユ文学に新たな境地を開拓したのものとしてコンデの創作活動を位置づけている。

以上のような構成と内容を有する本論文の学術的意義としては、次の諸点を挙げることができる。第一に、コンデの作家としての動向を広範な視野のもとに把握し、体系的な作家論・作品論を展開した学術論文としての価値である。コンデに関するこのような学術論文は、日本語で執筆されたものとしては先例がなく、本論文がそのはじめての本格的な研究を提示するものであって、この点での学術的な貢献には多大なものがあると評価される。

第二に、本論文がコンデの創作活動を狭義の国民文学という枠を超越した地平から意味づけるとともに、ネグリチュード論やクレオール諸理論との対比において、それをフランス語圏アンティユ文学の動向のなかに的確に位置づけていることである。これは日本におけるコンデ研究のみならず、日本におけるアンティユ文学研究をも確実に前進させる創見であり、大きな学術的貢献を果たすものと評価される。

第三に、本論文が多様な論点を複眼的に盛り込みながら、各部・各章が照応し合い、全体として緊密な論考が構築されていることである。なかでも、フランス共和国への対抗意識や共和国コンプレックスから創作活動を展開するアンティユ男性作家たちとは異なり、そうした呪縛から解放され、自由な個人として世界との関係を生きる作家としてコンデの本質を把握したことと、第2部において小説のもつ空間的志向性によって小説を分類し配列するという独自の構成方法を取ったこととは、フランスの外部である「アフリカ」、「アメリカ」、「アンティユ」という複数の地域を浮かび上がらせるという意味で有機的に結びついており、論述内容と論述構成との連関がとれた、説得力の豊かな論述を展開したものと評価される。

第四に、クレオールの話的世界がコンデの創作に及ぼす影響や、コンデ作品における歌の重要性に着目したことなど、本論文がコンデ作品を理解する上で新しい独自の知見を提供していることである。とりわけ、コンデ作品に民話の形象であるアナンシ(蜘蛛)と、それが紡ぎ出す糸による紐帯というイメージを読み取ったことは、ディアスポラにおける人の移動と拡散をネットワークとして把握する本論文の立論にかかわる重要な着眼であり、きわめて独創的なものがあると評価される。

もちろん、本論文に不十分な点があることもまた確かである。審査の席では、以下の点が指摘された。コンデが構想する共同体や共同体のアイデンティティについてより踏み込んだ考察をほどこすべきであったこと。コンデ作品における愛の問題が軽視されており、愛を通して境界を踏み越え、異なる文化のあいだを往来する女性という像が看過されていること。第2部が全体として諸小説の分析の並列であり、平板で山場のない論述に終始しているため、これらの小説群のなかでもより高く価値づけられるコンデ作品を焦点化すべきであったこと。「歴史」や「記憶」といったいくつかの理論的な概念について、本論文が参照している理論家たちの行論と本論文の論旨展開とが必ずしも整合的でない場合があること。コンデ作品を翻訳して引用する際、訳語の適切性を再考すべきものがあること、などである。

しかしながら、本論文が大きな問題設定のもとで、コンデ作品とアンティコ内外の文学作品との適切な比較を行いつつ、緻密かつ丁寧な記述と分析を積み上げた野心作であり、高度な学術的水準に達した論文であるとの見解で本審査委員会は一致しており、以上のような諸点も本論文の基本的な価値を損なうものではないと判断される。したがって本審査委員会は、本論文提出者が博士(学術)の学位を授与されるにふさわしいものと認定する。